

ダイヤモンド社のメルマガに下町ロケットの記事がありましたからご紹介します。

◆結果でなく、ダイジなのは働く理由『下町ロケット2 ガウディ計画』【書評】三谷宏治[K. I. T. 虎ノ門大学院主任教授]

[http://sys.diamond.jp/r/c.do?1AJk\\_1j92\\_QD\\_vow](http://sys.diamond.jp/r/c.do?1AJk_1j92_QD_vow)



『下町ロケット2 ガウディ計画』池井戸潤・著(小学館・刊)

この本『下町ロケット2 ガウディ計画』は、テレビでドラマが同時進行中という驚異的なもの。12月20日の最終回、見られましたか？でも、なんで本の原稿アップからたった2~3カ月で、テレビドラマ(配役やシナリオや台詞やロケ手配……)がつくれるのか、まったく意味不明です。

人間やろうと思えば何でもできる。いや、視聴率が稼げそうな「本」のためなら、テレビ局はあらゆる不可能を可能にする存在なのでしょう。

その配役で一番気になるのは、帝国重工の財前部長です。いわゆる「大企業の部長」役を、反逆のロッカー 吉川晃司が務めるというのですから、そそられます。これで主人公である佃航平(佃製作所社

長)役の阿部寛と2人、182cmと189cmのツインタワー。平均185cm超の圧倒的迫力です。視聴率20%超え(第5.8.10話)も頷けるといいます。

これで池井戸潤作品は、テレビドラマ界でもっとも視聴率が稼げる原作者の名を不動のものにしたのでしょう。ほとんどが同時期でのトップ視聴率を叩き出しているのですから(\*1)。

## なぜ『ガウディ計画』で「財前」が悪役でないのか？

しかしそんな神のごとき池井戸潤でも、見通せないことがあるのでしょうか。「財前部長」自身がそれを示しています。

このドラマ「下町ロケット」は、原作でいえばその1と2(ガウディ計画)を両方カバーする贅沢なものです。前半はロケットエンジン部品である燃料供給バルブがテーマで、後半はそれに医療機器である心臓用人工弁バルブが加わります。ロケット開発主体である帝国重工の財前部長は、その両方に関わりを持ち、ずっと登場する主要人物です。だからこそ吉川晃司！

でも、思いませんでしたか？ 医療テーマで「財前」といえば悪役の名前だろう、と。

山崎豊子『白い巨塔』(1965)は累計590万部を売った超ヒット作で、3度テレビドラマ化されています。物語の中核は、大学病院から下野した人権派の医師 里見脩二(2003年ドラマでは江口洋介が演じた)でも誰でもなく、その象牙の塔を登り詰めようとする新進気鋭の外科医 財前五郎(同 唐沢寿明)でした。傲岸不遜で上昇志向が強く、仲間を駒扱いし裏切りを許さない。患者を死なせてもそれを顧みず、組織の頂点を目指したスーパー・エリート医師。それが「財前」なのです。バリバリの悪役です。

それが『下町ロケット2 ガウディ計画』では佃製作所の医療分野進出をサポートする側に回っているという……。これは、変ですよ。さすがの池井戸潤も、『下町ロケット』を書いているときには、のちに佃製作所が医療分野に進出するとは、思ってもいなかったのでしょうか。

\*1 平均視聴率はなんと、2013年の『半沢直樹』が29%、2014年の『花咲舞』が16%、『ルーズヴェルト・ゲーム』が15%、2015年の『花咲舞2』が14%、『下町ロケット』が19%。でも私が一番好きなのは6%に留まった2013年の『七つの会議』(NHK)。

## なぜ佃製作所は医療分野に挑んだのか

本の帯にあるとおり、佃製作所は今回、「人体」に向かいます。ロケットの燃料供給バルブ技術を、人工心臓弁に活かそうというのです。「ガウディ計画」と名付けました。

まったくもって無謀です。開発期間の長さや万一のときの補償問題も大変ですが、開発の中心となるべき医師は象牙の塔の派閥争いに忙しいですし、それを越えても役所の壁が立ちはだかつて、と事業リスクが高すぎて目が回りそうです。

社長の佃航平本人もそれに戸惑います。思いもかけぬ競合の出現で、本業のロケットバルブの受注も危ういの……。そしていったんはその共同開発を断ります。経営的にムリだと。

今回、登場人物たちはみんな迷っています。佃航平は経営とは何かに迷い、心臓人工弁の開発者である一村(いちむら)医師は医療とはどうあるべきかに迷い、そして多くの社員が自分たちは何のために、誰の下で働くのか、に悩みます。

強い信念を持っていたはずの「神の手」一村医師すら、ある日眩(つぶや)きます。「医学ってのは、いったい何なんだろうな」

しかしそれに対して、秘書の中野綾は真っ直ぐに答えます。「病気で困っている人を救うものなんじゃないですか」「人の命が目の前にあったら、それをなんとか救おうとする。それが医者じゃないですか」「医者が医者たるのは患者に向き合ったときだと思えます」

一村はそれで目が覚めます。自分の心の狭さに気がつくのです。自分の研究を守りたいとしていたこと自体が、それに反する行為でした。彼は覚悟を決めて、仇敵に向かい合います。患者(特に子どもたち)の命を少しでも早く、少しでも多く、救うために。

そして、佃航平も気がつきます。経営とは算盤を超えて、夢でありミッション(使命)なのだと。

## ミッションは机上にはない。現場にある

まったくの私見ながら、『ガウディ計画』での**本当の主人公は佃航平ではなく、若き開発担当者 立花洋介**です。まじめさが取り柄で口数が少なく、当然台詞(せりふ)も大して無いのですけれど……。

彼は途中、人工弁の開発に行き詰まり、上司に訴えます。開発者である一村医師の下に行くために、福井に出張させてくれと。

「実際に見てきたいんです」「我々が開発しているものが果たしてなんであるのか」

福井出張は認められ、そして同僚とふたり、一村医師の心臓手術に立ち会います。それは、男の子の命が救われた瞬間でもありました。そのとき立花たちは、その「進むべき道」を確信するのです。

その「想い」こそが、この物語の最後の扉を開く力となります。どうしても開きそうになかった役所の厚く重い扉が、立花の熱い想いによって開かれるのです。

読み終わって思います。ああ、こんな仕事をしたい。こんな想いで働きたい。ただ一度の人生だから。

そんな夢やミッションが、ロケット部品の世界だけでなく、医療の世界にも確かにありました。だからこ

そ、佃製作所は、そして『下町ロケット』の舞台は、そこへと移っていったのでしょうか。作者の思惑を超えて。

と思っていたら、前作『下町ロケット』の最後には、佃航平のこんな台詞があるじゃないですか。  
「人工心臓、か……」「おもしろいじゃないか」  
う〜っむ、参った。池井戸潤の神算鬼謀、恐るべし。

## 『ガウディ計画』の舞台、福井について一言！

これから本を読まれる方、読み終えた方、そしてドラマを見終えた方にも、蛇足ながら2つ注釈を。経編(たてあみ)と福井について、です。

作中、桜田経編という福井の会社が出てきますが、その素はフクイタテアミ(福井経編興業)という実在の会社です。ドラマのロケも行われました。

作中に説明がないので、「経編」について解説します。経編とは「布地のつくり方」の一種(\*2)なのです。

- ・織物(ファブリック):経糸(たていと)と緯糸(よこいと)で「織る」もの
- ・編物(ニット):1本の糸で「編(あ)む」もの。経編と緯編(よこあみ)がある

緯編は伸縮性に富むためジャージやセーター・Tシャツなどに使われ、経編は特にしっかり筒状にできるので、シューズやクルマのシートに使われています。池井戸潤は昨年、その取材でフクイタテアミを訪れていた(\*3)のでした。目的はもともと「履物の甲材」でした。

ところが、フクイタテアミはその技術を、医療分野にも応用しようとしていたのです。心臓の穴を覆う補修材(パッチ)や、直径わずか1.5mmの極細人工血管が開発されようとしていました。彼がその姿を見たときに、「ガウディ計画」は本格的に動き始めたといってもいいでしょう。

もう一つは、私の郷里でもある福井について。

作中、いきなり佃航平が切り出します。「福井とは、また随分、遠いところへ行くんだな」

いやいや、小松空港経由なら、東京・大田区の佃製作所から福井駅まで3時間弱。作者の郷里の岐阜駅まで名古屋経由で行くのと、大して変わらんぞ(笑)

## 未来に挑む試行錯誤。それを乗り切るための夢・ミッション

福井は人口が80万人ちょっとの小さな県です。昔から、日本一女性が働くところで、3世代が同居もしくは近接地に住み、ひとりあたり収入は低くとも世帯あたり収入は全国トップクラス(\*4)。子どもたちは保育園に預けられてのびのび育ち、小中学校では全国1・2位の学力と体力を誇ります。降雨降雪で湿度が高いため(乾燥による静電気を嫌う)繊維産業が盛んで、それがフクイタテアミなどにもつながりました。越前市の打ち刃物、鯖江市のメガネフレームなど、世界に誇る技術もあります。日本固有種の過半を産出(\*5)する「恐竜」だって！

しかし、まだまだ足りないものもあります。それが夢やミッションでしょう。若い世代をもっと福井に惹きつけるために、必要なのは「面白い仕事」です。人口71万人の東京・大田区になんて負けてられませ

ん。

未来に挑む、夢をつくりましょう。働く理由をつくりましょう。

人工弁の開発で、延々と試行錯誤を繰り返す立花と同僚。ムダにならないといいけれど、と呟く同僚に、立花はぼそりと言います。

「結果、考えるなよ」「それよか、理由の方が大事じゃん。ぼくたちがなんで、これをやっているのか」ひとりひとりが働く理由を持てたとき、そのチームや会社は、何倍もの力を発揮するのです。

\*2 織る、編む、の他に、針や水で繊維を絡め合わせる「不織布」というものもある。フェルトやオムツのシートなど。

\*3 池井戸潤に頼まれ、福井の友人 揚原安麿に取材先の選定と紹介を依頼した。

\*4 2009年度は東京に次ぎ全国2位。

\*5 学名がついている日本固有の恐竜6種のうち、4種の化石が福井県勝山市で発見されている。福井県立恐竜博物館は年間70万人を集める。

<経営のヒント>

池井戸潤。彼の著書は何冊かを読んでおります。

特に「空飛ぶタイヤ」「下町ロケット」の経済小説は個人的には大好きです。

下町ロケットには、経営のヒントが多くあるように感じます。

先日のメルマガでは、私が考えるヒットした理由は下記です！と書きました。

カタルシス

勸善懲悪、正義と悪、

熱意と冷淡、有能と無能

中小企業（町工場）と大企業

理系

ドアップ顔芸

熱い、男気、魂

夢、人生の生きる意味（目的）

そして最後に、英雄伝説（ヒーローズジャーニー）だから感動、共感する！

この中で一番は、ヒーローズジャーニーです。

三谷宏治[K. I. T. 虎ノ門大学院主任教授]氏の視点。

今回のガウディ計画の主人公は「立花洋平」ではないか？との指摘に、「う～ん」と唸りました。

するどい！

私のドラマの中で彼の言葉や演技に何度も涙しました。

今一度、見てみたいですね。

又、次の映画が楽しみにになります。